

今日は、お天気に恵まれて、明るい光の中、花吹雪を受けて入学式を迎えました。新入生の皆さんご入学おめでとうございます。

また、感染症対応の為、この会場には居られません。新入生の保護者の皆様に心よりお喜びを申し上げます。おめでとうございます。

学長の三明智彰です。

新入生の皆さんを迎えて、この講堂も清新の気満ちて花が咲いたようです。

本日は、京都の真宗本願寺・東本願寺にあります学校法人真宗大谷学園本部から、財務理事の酒井良先生にお越しいただきました。ありがとうございます。九州教区教務所長中根慶滋様、同窓会蓮原耕児様にご臨席をいただき、非常勤講師の先生方とともに本学教職員挙げて、九州大谷短期大学の第五十三回の入学式を迎えられましたことを有難く存じます。

新入生のみなさんは、おとし春からの、新型感染症流行の嵐の中で、不安や様々な困難を抱える中を、よく乗り越えて、きょうの日を迎えられました。まことに、おめでとうございます。

ご入学を迎えたみなさんに、学長として本学の学びの特徴をお伝え申したいと思います。

九州大谷短期大学は、人間を学ぶ大学です。

今までみなさんは、高校まで、或いは社会の中で様々なことを学んで来られたと思います。この世の中には、さまざまな学問・研究がありますが、それらは、何を目的として行われているのでしょうか。世界の情勢を見聞きするにつけ、私どもの学びが、危機に瀕していることを痛感いたします。

もろもろの学びの根底に、決して外してはならないことがあります。それは、人間学、人間を学ぶということです。どれほど専門性が深められ、研究が進んでも、人間の尊厳性を無視し、人を傷つけるための学問研究であってはなりません。人間を見つめ大切にする、人間としてのまなびが諸学の基礎になればならないと私は思います。

「学生要覧」のはじめには、真宗大谷学園存立の精神と呼応して、

人生の主体者となる

共に歴史と世界を生きる

問いを学ぶ

という本学の願い（建学の精神）を掲げています。

まず、我われは、他に支配されることなく、自分の人生を自分自身として生きていかなければなりません。

しかし、それはわがまま勝手に他をないがしろにし、傷つけることであったりません。共に生きていかなければならないのです。

この一見矛盾に見えることを実現して行くのには、それは何なのか、それはなぜなのか、それにはどのようなようにすればいいのか、という、何を・なぜ・どのようにという問いを以て学んでいかなければなりません。

本学は、「私のままで輝ける」をテーマとして、自分とは何か、人間とは何か、を問いかつ学ぶ人間学の大学です。

その根源として、私は、

自燈明 自らを燈明（ともしび）とせよ

との言葉を思います。本学本館入り口と講堂から出た国道に面した掲示板とにこの言葉を掲げています。

釈尊が、亡くなろうとされていた時に、つねにおそばに仕えていたアーナンダは、嘆きつつ釈尊にお願いと質問をしました。

「どうか死なないください。世尊（釈尊）だけがたよりです。よりどころなのです。世尊がおなくなりになったら、私は、何をたよりとして、何をよりどころとして生きていけばよいでしょう。どうか亡くならないください」と。

釈尊は答えられました。

「自燈明 法燈明」（自らを燈明とせよ 法を燈明とせよ）。

闇の夜を照らす燈明のように輝く自己自身を、法（真の道理）によって見出しなさい、と教えられたのです。

まことの道理とは、例えば、諸々のものは単独で存在するものはない。お互いが関係の中でお互いを成り立たせあっているということです。また、生まれた者は必ず滅する。だから、今ここにいる自己自身を大切にということです。

他の人と比べて、威張ったり落ち込んだりしがちな私たちですが、私には私にしかない尊いものがある。

このような教えに聞きつつ、きょうから、私が私自身として喜びをもって生きるという「私のままで輝ける」を合言葉として学びを始めましょう。

お互いに声を掛け合って、友と出遇い、師と出遇い、学んで行きましょう。私たち教職員に何でも相談してください。

私たちは、九州大谷短期大学を学びの場として、皆さんが健康で生き生きと、充実した学園生活を送られるように念じ勤めていきます。よろしく願います。以上を以て学長としての式辞といたします。

ご入学おめでとうございます。

二〇二二年四月五日

学校法人真宗大谷学園 九州大谷短期大学学長 三明智彰